

完全決定版！

文章のイロハから出版社に企画書を提出するまで！

最短距離で作家になる方法

作家・コンサルタント
中島孝志

目次

[序章 だれでも作家になれる時代！](#)

パート1 「なにを書くか」篇

[第一章 テーマをどうする？](#)

[第二章 どんな内容にする？](#)

パート2 「どう書くか」篇

[第三章 「気持ちよく読める文章」ってどう書くの？](#)

[第四章 「出だしの三行ですべて決まる」ってホント？](#)

[第五章 「イメージが湧いてくる」ってどんな文章？](#)

パート3 「夢の印税生活！」実現マニュアル篇

サラリーマン、35歳過ぎたら本を書け！

[第六章 サラリーマン、十年やったら本が書ける](#)

[著者プロフィール](#)

序章 だれでも作家になれる時代！

はじめに 魅力的な文章はだれでも書ける！

いきなりですが、クイズです。次の人たちに共通することを当ててください。

安倍晋三、カルロス・ゴーン、ウインストン・チャーチル、松下幸之助、三波春夫、リチャード・ニクソン、ビートたけし、小椋佳、松本人志、押切もえ・・・。

さて、おわかりになりましたか？

「お金持ち！」

たしかにそうかもしれません。でも、それは出題者が期待する正解ではありません。

「好き放題やってきた人！」

そういう面があるかもしれません。それは否定できません。でも、それはどういうことですか？ いろんなチャンスに恵まれた。自分でチャンスをつかみ取ってきた。そして、トライした。

「わかった。本業以外にいろんなことを手がけた人だ」

ピンポン。その通りです。参考までに、出題者が期待した正解は「作家」、あるいは「二足の草鞋を履いた人物」でもいいでしょう。

「ウッソー」ではありません。かつて松下幸之助さんはこんなことを言ったことがあります。

「ぼくは会社を経営してるけれども、本も書いている。この前、出したのも十万部くらい売れたね。早い話が作家としても食うていけるんや、ホントは」

ここに上げた人はみなさん、本業を持っています。政治家、経営者、歌手、タレント、漫才師・・・でも、すべての人が作家でもあるのです。

しかも、半端ではありません。ほとんどの人がミリオンセラー作家なのです。

チャーチルがノーベル賞を受賞したことは有名ですが、それは平和賞でもなければ経済学賞でもありませんでした。彼に与えられたのはノーベル文学賞でした。

現代は表現の時代だ、と思います。だからといって、ここにあげた方々のように超弩級のベストセラー作家になれと薦めるわけではありません。

本業を持ってる人でも、これだけ読まれる文章を書いているという事実注目して欲しいのです。なぜ書けるのか？ なぜみんなが注目するのか？ それは彼らが魅力溢れる人間たちだからです。彼らが培ってきたスキル、ノウハウ、哲学、生き様にだれもが関心があるからです。

どう書くかというノウハウよりも、なにを書くか、なにを伝えるか、なにを表現するかというテーマ設定がいちばん重要なのです。ですから、本書もまず「なにを書くか」というテーマについて言及することになりました。

具体的な書き方、表現の方法、技術は、その後にお手本を紹介しながら説明することにしてあります。

パート1 「なにを書くか」篇

第一章 テーマをどうする？

□すべてはテーマで決まる

結論からいいます。

小説にせよ、エッセイにせよ、ビジネスレポートにせよ、なにを書くか、どう書くかはすべてテーマで決まります。テーマをどう設定するかで内容も書き方もがらりと変わってくるのです。

テーマとはなにか。「いちばん言いたいこと」です。

たとえば、「アメリカ同時多発テロの悲惨さ」をテーマにして書こうとすれば、被害者数をデータで分析したり、生存者へのインタビューや被害者の家庭の「その後の人生」を追いかけることも考えられます。

逆にテロリストの生き様や育った環境にスポットライトを浴びせる手もあります。

経済的な観点から、被害にあった企業と社員の命運、あるいは株価の乱高下に翻弄される人々をとらえることもできますし、超大国と貧困地域との対比から論を進めることもできます。

テーマは一つでも、それをどう書くか、どう表現するかは星の数ほどあるわけです。

表現力はテーマを語るために、いろんな文章を駆使して説明したり描写したりするベースになるものです。

あくまでもテーマありきです。

ですから、テーマがあいまいだったりぼんやりしていると、相手に意味はなかなか伝わりません。どんなに簡単な表現を使ったとしても、「いったい、この人、なにが言いたいのか？」というようにとりとめのない文章になってしまうわけです。

しかし、「これを伝えるぞ」とテーマが明確ならば、たとえあっちこちに話題が飛んだとしてもメッセージは通じるものです。

まず、テーマありき。それが文章の本質だということを押さえておきましょう。

□まず献立を考えよう

しかし、「そのテーマが思い浮かばないんだ」という人を時々見受けられますが、これはダメです。目

的地がわからないでフラフラ旅に出るようなもので、一緒につきあう人（相手）はたまったものではありません。

逆に、あなたがいま博多に行きたいなど目的地が明確になっているならば、「いま、どこ？」「東京」「東京のどこ？」「羽田」「それなら、飛行機でいけばいいじゃないの」とか、「いま、東京駅」「じゃ、新幹線にしたら」と目的地にたどり着くための具体的方法論がわかります。

でも、これが「どこに行きたいのかわからない」では、そこから一步も踏み出せません。

テーマというのはそういうものです。

もう一つ、お話しします。

今夜の献立を考えると、大きく分けて二つの方法があると思うのです。

一つはスーパーに出かけて、「ああ、今日は肉が安いなあ。じゃ、ステーキにでもしようかな」という方法。もう一つは冷蔵庫を開けて、「豚肉とジャガイモが残ってるな。よし、肉ジャガにでもするか」と決めて、タマネギ、ニンジン、それに塩、こしょう、しょうゆに砂糖、みりんやお酒といった足りない食材を用意する方法です。

前者は良くいえば、臨機応変、まあ行き当たりばったりということですが。後者は決めうちとっていいでしょう。いずれにしても、この二つの方法がありますね。

さて、テーマを考えると、この二つの方法があるのです。

たとえば、「人間愛を描きたい」というテーマがあるとしましょう。これは決めうちです。もう「人間愛」という献立が決まってるわけです。

内容はどうするか？

それをこれから錬るのです。

内容とは料理で言えば、食材のことです。文章における食材とは、主人公、登場人物、事件、会話、風景などのことです。こんな材料があると彩りを添えておもしろくなるな、というものすべてが文章の食材になります。

もう一つの方法、すなわち、臨機応変、行き当たりばつたりの方法を説明しますとこうなります。

たとえば、あるユニークな事件が発生したとしましょう。あなたはその事件からピンと閃くものがあった。

「よし、これを材料に小説を書いてみよう」と考えた。

これが行き当たりばつたりの文章術です。行き当たりばつたりだから悪いことはけっしてありません。思わず影響を受けたり、刺激を受けたりするほど、強烈な事件だからこそ、それを材料にしてテーマをこしらえようとするものです。

この行き当たりばつたりの代表的な例に三島由紀夫（敬称略、以下同じ）の小説『金閣寺』があります。この作品についてはあとで詳しく話します。

□文豪がほんとうに伝えたかったこと

ごちゃごちゃ言ってきましたが、論より証拠。具体的作品を取り上げてみたい、と思います。

次の文章はあまりにも有名な小説の出だしです。

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。

私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲がった急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。あまりに期待がみごとに的中したからである。

そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子がすぐに自分の座蒲団を外して、裏返しにそばへ置いた。「ええ……」とだけ一手、私はその上に腰を下ろした。坂道を走った息切れと驚きで、「ありがとう」という言葉が喉にひっかかって出なかったのだ。

川端康成の『伊豆の踊子』ですね。

美空ひばり、吉永小百合、山口百恵といった、その時代、時代を代表する女優によって踊子が演じられるなど、何本も映画化されてきましたが、それらに共通するテーマは「純愛」です。

しかし、川端が描きたかったテーマは純愛ではありません。彼が書きたかったことは「自我の目覚め」です。テーマはあくまでも「自我の目覚め」であって、純愛物語ではありません。「自我の目覚め」を読者にスムーズに受け容れてもらえるように『伊豆の踊子』という物語を用意したわけです。

□表のテーマ、裏のテーマ

青年時代の川端は小柄で瘦躯。特徴のあるギョロリとした眼つきで本ばかり読んでいました。スポーツなどなんら関心がなく、少年雑誌にせっせと文章を書いては投稿するという毎日でした。

一歳で父親と、二歳で母親と死に別れたあと、たった一人の姉ともわかれわかれの生活を余儀なくされ、彼は祖父母の下で育てられます。ところが、その祖母も彼が小学校入学と同時に亡くなり、伯母の家にいた姉もその後、一度しか会えないままに亡くなります。たった一人残った祖父にしても、この伊豆の旅に出るころにはすでにいません。

つまり、彼は自分で言うように「孤児根性で歪んでいた」のです。

ところが、その歪んだ性格が伊豆の旅で癒されるんですね。

どのように癒されたか……。彼は実らぬ初恋を経験しながら、同時に人間的に解放されていきます。その一部始終を赤裸々に告白した文章がこの『伊豆の踊子』なんです。

汽船が下田の海を出て伊豆半島の南端がうしろに消えて行くまで私は欄干に凭れて沖の大島を一心に眺めていた。踊子に別れたのは遠い昔であるような気持ちだった。

私はカバンを枕にして横たわった。頭が空っぽで時間というものを感じなかった。涙がぼろぼろカバンに流れた。頬が冷たいのでカバンを裏返しにしたほどだった。私の横に少年が寝ていた。河津の工場主の息子で入学準備に東京へ行くのだったから、一高の制帽をかぶっている私に好意を感じたらしかった。少し話してから彼は言った。

「何かご不幸でもおありになったのですか」

「いいえ、今人に別れて来たんです」

私は非常に素直に言った。泣いているのを見られても平気だった。私は何も考えていなかった。ただ清々しい満足の中に静かに眠っているようだった。

少年が竹の皮包を開いてくれた。私はそれが人の物であることを忘れたかのように海苔巻のすしなぞを食べた。そして少年の学生マントの中にもぐり込んだ。私はどんなに親切にされても、それを大変自然に受け入れられるような美しい空虚な気持ちだった。明日の朝早く婆さんを上野駅へ連れて行って水戸まで切符を買ってやるのも、至極あたりまえのことだと思っていた。何もかもが一つに融け合って感じられた。

船室の洋燈が消えてしまった。船に積んだ生魚と潮の匂いが強くなった。真暗な中で少年の体温に温まりながら、私は涙を出まかせにしていた。頭が澄んだ水になってしまっていて、それがぼろぼろと零れ、その後には何も残らないような甘い快さだった。

――川端康成『伊豆の踊子』（集英社）

『伊豆の踊子』のラストシーンです。

ぼろぼろ涙を出きかせにしてもかまわない。人からどう思われようが気にしない。

「何かご不幸でもおありになったのですか」と聞かれて、「いいえ、今人に別れて来たんです」と正直に答えることなど、孤児根性で歪んでいた彼には考えられないことだったと思います。ただ清々しい満足の中に静かに眠っている自分を発見したとき、やっと過去の自分から卒業できたことを川端は知ったのです。

この伊豆の旅は彼にとって、過去の自分から決別するための心の旅路であり、卒業旅行だったわけです。

一見、テーマは「純愛」と錯覚されがちですが、それは世を忍ぶ仮の姿。ほんとうのテーマは「自我の目覚め」にあります。いわば、純愛はお客さん（読者）のために用意した表のテーマ、でも実は自分自身のための裏テーマがあったというわけです。

□テーマは着眼点で決まる

川端がこの作品を書き上げたのは、彼自身の強烈な体験がベースにあります。

人がなにかを表現しよう、伝えようとするとき、そのエネルギーになるものは必ずといっていいほど体